仙台市文化財調査報告書第104集

富沢遺跡

——東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う
発掘調査報告書——

昭和62年3月

仙台市教育委員会
東北地方建設局

仙台市文化財調査報告書第104集

富　沢　遺　跡

——東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う
発掘調査報告書——

昭和62年3月

仙台市教育委員会
東北地方建設局

序

ここ富沢地区は東北地方の稲作農耕文化を考える意味で考古学上重要なところとして注目をあつめています。これまで東北地方の歴史は辺境の地とされ、古代律令社会の誕生をもって東北にもようやく稲作文化が到来するものとされていましたが、近年の考古学の進展に伴い、昭和56年には本州の最北端ともいえる青森県田舎館村垂柳遺跡において弥生時代中頃の水田跡が検出されるに至りました。昭和57年になって仙台平野、特に富沢地区でも弥生時代中期頃の水田遺跡が確認され、西日本の弥生文化とそう時間的なへだたりをみることなく、稲作農耕社会が展開していることが立証されたのです。このことは次代の史跡遠見塚古墳（4世紀末から5世紀初頭）の存在や多賀城以前の地方官衙の存在を明らかにした郡山遺跡に継承されていることを容易に裏付けられることとなったのです。

本報告書は東北地方建設局職員寮建設に伴う事前調査の成果をまとめたものです。ここにも先人の生活の証をみることができます。

こうした調査は大変地味な営みでありますが、多くの市民や東北地方建設局の多大なご理解があってのことと深く感謝を申し上げる次第でございます。また、本調査や報告にあたっては多くの学識諸氏のご指導助言をいただきましたことを伏して御礼申し上げますとともに、本書がより多くの方にご活用いただけることを願って挨拶といたします。

昭和62年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う富沢遺跡鳥居原地区（仙台市長町七丁目12番地）における発掘調査報告書である。

2．本書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆　金森安孝（Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ）
斎野裕彦（Ⅲ・Ⅳ「仙台市文化財調査報告書　第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ」より調整）・松本清一（Ⅵ・Ⅶ）

遺物写真　松本清一

整理作業　小林　充・小野寺雄・山田敏雄・庄司信哉・山田　太・大友義信・鈴木正道・真中雅子・佐藤浩道

3．調査にあたり、次の方々の御指導、御教示を賜った。

伊東信雄・東北大学理学部　豊島正幸

4．本書に使用した地図は国土地理院発行の５万分の１「仙台」を複製した。

5．本書の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原 1970）を使用した。

6．本書中の方位角は真北線を基準としている。

7．本書に関係する出土遺物、作成図面、写真は一括して仙台市教育委員会が保管している。

目　　次

序
例　　言
Ⅰ．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．調査体制…… 1
Ⅲ．遺跡の位置と環境…… 2
Ⅳ．周辺の遺跡…… 3
Ⅴ．調査の方法と基本層位…… 7
Ⅵ．発見遺構と出土遺物…… 7
Ⅶ．ま　と　め…… 19

写真図版…… 21

Ⅰ　調査に至る経過

仙台市の南部富沢地区は、昭和56年度より着手された高速鉄道（地下鉄）建設工事に伴う発掘調査によって、これまで調査の対象とされていなかった後背湿地から水田跡が発見され、中世から古代、さらには弥生時代まで遡る一大水稲生産の場として着目されるようになった富沢遺跡（昭和61年９月に遺跡名称を「富沢水田遺跡」から「富沢遺跡」と変更している）の中心部を占める。

今回の調査は，富沢遺跡の北東部鳥居原地区（仙台市長町七丁目12番地）における東北地方建設局長町宿舎の老朽化による新築計画に基づくもので、仙台市教育委員会では、東北地方建設局と協議を行ない、同宿舎建築部分のうち、約230㎡を対象とする調査を昭和61年６月より実施することにした。

本調査区の鳥居原地区における調査は、昭和58年11月から12月にかけて実施された店舗建築計画に伴う遺構確認調査と、昭和60年６月から昭和61年５月にかけて実施された都市計画街路長町折立線建設工事に伴う発掘調査がある。これらの調査によって、平安時代と弥生時代における水田跡の存在が確認されている。さらに一部では縄文時代の遺物包含層も検出されており、鳥居原地区の北側への遺構の広がりが予測された。

Ⅱ　調 査 体 制

１．遺跡所在地　　仙台市長町七丁目12番地

２．調査期間　　昭和61年６月６日～８月30日

３．調査面積　　230㎡（対象面積 346.79㎡）

４．調査主体　　仙台市教育委員会

５．調査担当　　仙台市教育委員会文化財課調査係

文化財課長　　早坂春一

文化財調査係長　佐藤　隆

調査員　　主事　金森安孝　　教諭　松本清一

６．調査参加者　　小林　充、庄子信哉、山田　太、大友義信、鈴木正道、大友フミ子、浅見禮子、大山のり子、柏倉セツ子、斎藤紀子、佐藤みよ、本郷孝治、吉野たまこ、庄子和子、三浦芳子、菅井きみ子、菅井ちよの、菅井民子、洞口秋子、竹森光子、浅見しげ、大沼みさほ、米倉節子、藤原ミサ、阿部則子、小林斎美、宮本正俊、小野寺雄、山田敏雄

Ⅲ　遺跡の位置と環境

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いに船形山、面白山を擁し南北に連なる奥羽山脈と、ここより派生する陸前丘陵、さらに東方へ広がる宮城野海岸平野(註1)よりなる。仙台市近傍では、陸前丘陵を広瀬川と名取川が東流しており、その河間丘陵地を青葉山丘陵、広瀬川以北を七北田丘陵、名取川以南を高館丘陵とそれぞれ命名している(註2)。両河川は中流域に下刻作用により4～5段の段丘地形を発達させており、丘陵を貫流したのち、沖積作用により宮城野海岸平野を形成してきている。宮城野海岸平野は地理的条件や成因、地質などから地形区分がなされており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼んでいる(註2)。

富沢遺跡は、これら低地の中で郡山低地に所在する。郡山低地は、北東縁と南縁を広瀬・名取両河川により画され、北西縁には長町―利府線(註3)が走り、青葉山丘陵と名取台地に接している。標高は約7～20mである。当低地では広瀬・名取両河川沿いに自然堤防が良好に発達しているほか、その中央を南北に走る自然堤防も見られる。そして自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。富沢遺跡は低地西半部の後背湿地にそのほとんどが立地し、標高は9～16m、面積約80*ha*である。この地域は、北方・南方・東方を自然堤防により囲まれており、南部には名取川の支流である笊川が曲流している。また、中央部には微高地が西方の丘陵より東へ伸びており、遺跡を二分するかのような景観を呈している。

富沢遺跡鳥居原地区における今回の調査対象区は遺跡の北東端に位置している（第2図2）。

なお、富沢遺跡は昭和58年6月3日付で仙台市遺跡台帳に遺跡番号C－301として登録されている。登録の理由は以下の通りである。

昭和56年4月から、仮称仙台市体育館建設に伴う山口遺跡（第2図44）の調査が行なわれていたが、プラント・オパール分析に基づいた調査の結果、昭和57年5月、平安時代の水田跡が検出された。山口遺跡の立地は自然堤防から後背湿地にかけてであり、南半の自然堤防上からは住居跡が、北半の後背湿地からは水田跡が検出された。水田跡はさらに北方に広がる後背湿地に続いているものと考えられ、プラント・オパール分析では平安時代以前の水田跡の存在も予想された。また郡山低地西半部では、昭和56年度より仙台市高速鉄道関係遺跡の調査が行なわれていたが、昭和57年度には後背湿地の路線敷部分の試掘調査が行なわれ、山口遺跡同様平安時代の水田跡が検出されたほか、弥生時代・中世の水田跡が検出されるに及び、郡山低地西半部の後背湿地には水田跡が広く存在することがほぼ確実となった。このため、地形・標高等を考慮して遺跡の線引きを行ない、昭和58年6月3日の登録となった。当遺跡の命名は、遺跡が広範なため字名がいくつかある中の最も代表的な富沢という地名を選び、水田跡が主たる遺

跡の性格であることから「富沢水田遺跡」とした。なお、その後の調査によって、さらに下層より縄文時代の遺物包含層を検出し、生活面の存在が確認されるに及び、昭和61年９月「富沢遺跡」と改称した。

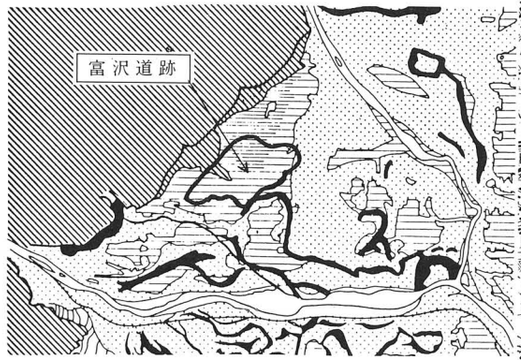
Ⅳ　周辺の遺跡

郡山低地やその周辺には旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡が分布している。この地域には丘陵・段丘・河川・自然堤防・後背湿地といった地形が展開しており、人類の歴史と密接な関係をもってきている。

旧石器時代の遺跡では名取川左岸の台ノ原あるいは上町段丘上に立地する山田上ノ台遺跡と北前遺跡があり、前期及び後期旧石器時代の遺物を出土している。縄文時代の遺跡は、段丘上に立地する北前遺跡、山田上ノ台遺跡、三神峰遺跡、上野遺跡や自然堤防上に立地する六反田遺跡や下ノ内遺跡がある。現在のところ、沖積平野で検出された遺構としては六反田遺跡の大木８ｂ式期の竪穴住居跡が最も古い。弥生時代以降では、集落跡は稲作の生産域である後背湿地周辺の自然堤防上や段丘の縁辺に立地することが多いと考えられる。弥生時代の水田跡は富沢遺跡で検出されているが、これに伴なう集落跡は不明である。しかし平安時代では、富沢遺跡で水田跡が検出されており、周辺の平安時代の集落跡との関連が考えられ、この時期には山田上ノ台遺跡や北前遺跡のように、既に後背湿地を離れてより高位の段丘上にも集落跡が検出されている。中世になると丘陵や自然堤防上に舘が作られるようになる。

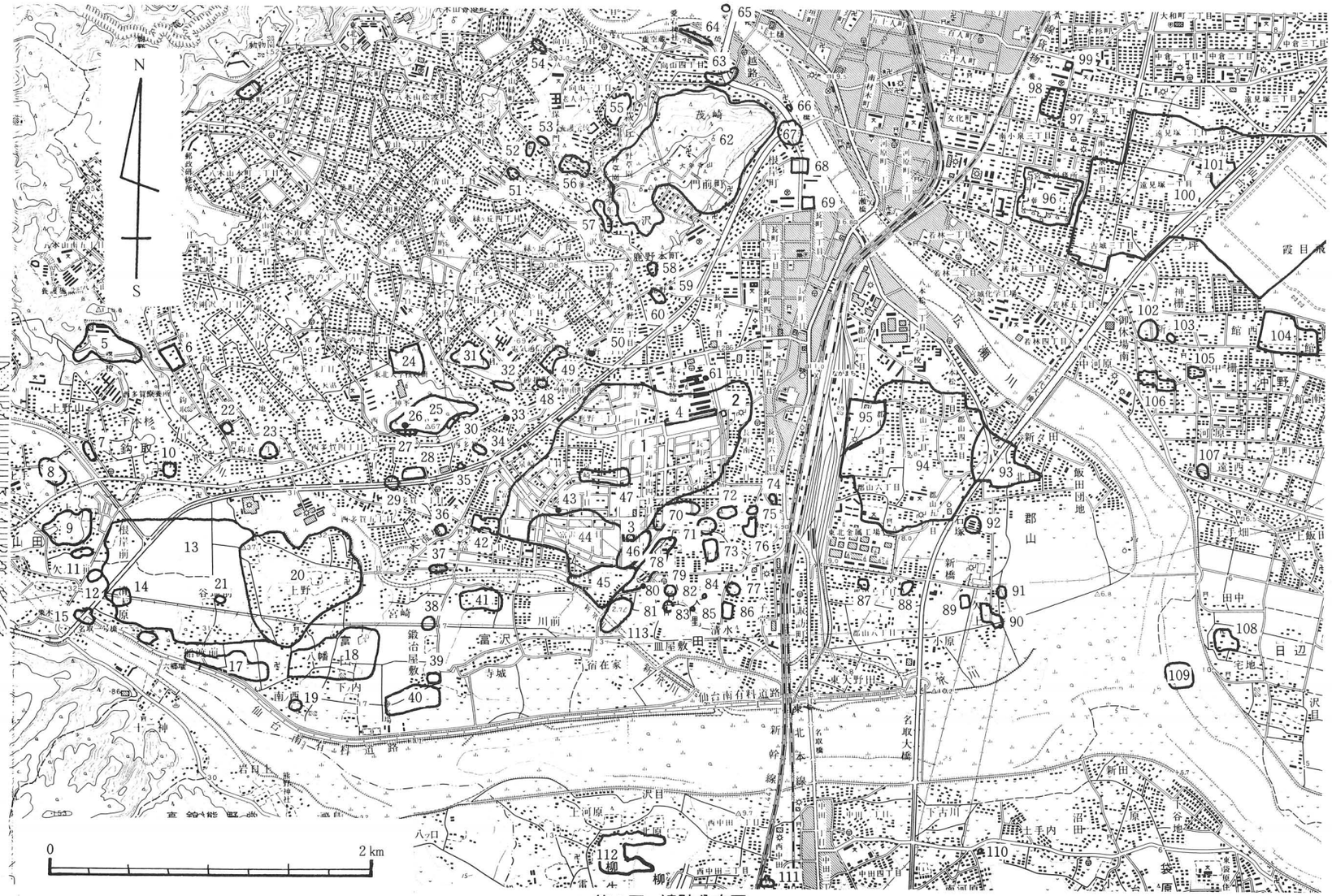
以上の郡山低地及び周辺の遺跡の分布は現在の知見であり、今後遺跡数の増加が考えられる。特に旧石器時代の遺跡は、山田上ノ台遺跡・北前遺跡と同一段丘では、同様の遺跡の発見の可能性は高く、他の段丘においても、今後の調査に期待されるところが大きい。また、旧石器時代や縄文時代早期の海水準が現在よりかなり低く、その後の海水準変動と名取川の土砂の供給量が極めて大きいものであったことを考えれば(註４・註５)、縄文時代以前の遺跡が沖積平野のより深い所から新たに発見されることは想像に難くなく、昭和60年度都市計画街路長町折立線鳥局原地区の調査では、縄文時代の遺物包含層を検出している。

さて、各時代の遺跡は、その性格が立地条件と不可分のものであることが多く、縄文時代後期・晩期に不明な部分はあるが、弥生時代以降の集落立地は、稲作や土木技術の発達による生産性の向上、生産域の拡大、変化に基礎を置くものと考えられる。各遺跡を空間的・時間的に結びつける上で富沢遺跡の存在は大きな意義をもつものと言える。



丘陵段丘　沖積錐　旧河道
自然堤防　後背湿地／低湿部

第１図　周辺の地形分布図



第２図　遺跡分布図

No	遺跡名	立地	種別	時代
1	**富沢遺跡**	**後背湿地**	**水田跡**	**縄文～近世**
2	**富沢遺跡**	**鳥居原地区調査地点**		
3	富沢遺跡	下ノ内浦地区		
4	富沢遺跡	仙台市高速鉄道関係遺跡鳥居原・中谷地地区		
5	御堂平遺跡	丘陵段丘	集落跡	縄文・平安
6	紙漉山遺跡	丘陵	包含地	縄文
7	上野山遺跡	段丘	包含地	縄文
8	北前遺跡	段丘	集落跡	旧石器縄文,古墳,平安近世
9	山田上ノ台遺跡	段丘	集落跡	旧石器縄文,平安近世
10	町遺跡	段丘	包含地	縄文、古墳、平安
11	汚田通A遺跡	段丘	包含地	平安
12	汚田通B遺跡	段丘	包含地	平安
13	山田条里遺跡	段丘	条里道構	
14	竹の内前遺跡	段丘	包含地	奈良、平安
15	清田原西遺跡	段丘	包含地	縄文、平安
16	清田原東遺跡	段丘	包含地	縄文、平安
17	船渡前遺跡	自然堤防	包含地	
18	南ノ東遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	弥生、平安
19	富田南西遺跡	自然堤防	包含地	奈袖、平安
20	上野遺跡	段丘	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
21	谷地前遺跡	段丘	包含地	平安
22	後田遺跡	段丘	集落跡	縄文・奈良・平安
23	八幡遺跡	段丘	包含地	古墳、平安
24	芦ノ口遺跡	段丘	集落地	平安
25	三神峯遺跡	段丘	集落跡	縄文(前・中)
26	三神峯古墳群	段丘	円墳	古墳（後）
27	富沢窯跡	段丘	窯跡	古墳・奈良・平安
28	原遺跡	段丘	包含地	弥生・古墳・平安
29	西台窯跡	段丘	窯跡	奈良、平安
30	金山窯跡	段丘	窯跡	古墳(5C中～5C後)
31	土手内遺跡	丘陵	窯跡	縄文、奈良、平安
32	土手内窯跡	丘陵	窯跡	奈良、平安
33	金洗沢古墳	段丘	古墳	古墳
34	裏町古墳	段丘	前方後円墳	古墳
35	原東古墳	段丘	包含地	古墳、奈良、平安
36	富沢上ノ台遺跡	段丘	包含地	縄文、平安
37	堀ノ内遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
38	鍛冶屋敷A遺跡	後背湿地	包含地	奈良、平安
39	鍛冶屋敷B遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	縄文、奈良、平安
40	六本松遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	奈良、平安
41	富沢館遺跡	自然堤防 後背湿地	城館	室町
42	富沢清水遺跡	後背湿地	包含地	奈良、平安
43	教塚古墳	後背湿地	古墳	古墳
44	山口遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡	縄文弥生・古墳・平安
45	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安
46	下ノ内浦遺跡	自然堤防	包含地	縄文・弥生・奈良・平安
47	泉崎浦遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡？	縄文、古墳、平安
48	砂押古墳	段丘	円墳	古墳
49	砂押屋敷遺跡	段丘	包含地	奈良、平安
50	二塚古墳	後背湿地	前方後円墳	古墳
51	青山二丁目遺跡	丘陵	包含地	奈良、平安
52	二沢遺跡	丘陵	包含地	縄文
53	八本山緑町遺跡	丘陵	散布地	縄文
54	向山高裏遺跡	丘陵	前方後円墳	縄文
55	萩ヶ丘遺跡	丘陵	包含地	縄文、奈良、平安
56	萩ヶ丘B遺跡	丘陵	包含地	縄文
57	二ッ沢横穴群	丘陵	横穴墓	古墳
58	鹿野屋敷遺跡	段丘	包含地	古墳、奈良、平安
59	一塚古墳	後背湿地	円墳	古墳
60	鹿野一丁目遺跡	段丘	包含地	縄文・弥生・奈良・平安
61	金岡八幡古墳	後背湿地	円墳	古墳
62	茂ヶ崎城遺跡	丘陵	城館	室町・江戸
63	愛宕山横穴群A	丘陵	横穴墓	古墳
64	愛宕山横穴群	丘陵	横穴墓	古墳、奈良
65	土樋一丁目遺跡	段丘	包含地	縄文
66	宗禅寺横穴古墳群	段丘	横穴墓	古墳末～奈良
67	根岸遺跡	丘陵斜面	集落跡か	縄文
68	兜塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳
69	小兜塚古墳	自然堤防		古墳
70	袋東遺跡	自然堤防	包含地	古墳、平安
71	元袋Ⅱ遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	奈良、平安
72	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
73	大野田遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	縄文(後)弥生(中)
74	長町六丁目遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
75	長町南遺跡	自然堤防	包含地	
76	新田遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
77	北屋敷遺跡	自然堤防 自己河道	包含地	平安,中世,江戸,明治
78	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文、弥生、古墳 奈良、平安
79	五反田古墳	自然堤防	円墳	古墳
80	五反田木棺墓	自然堤防	木棺墓	古墳
81	五反田石棺墓	自然堤防	石棺墓	古墳
82	大野田古墳群	自然堤防	円墳	古墳
83	春日社古墳	自然堤防	円墳	古墳
84	王の壇古墳	自然堤防	円墳	古墳
85	鳥居塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
86	長町清水遺跡	自然堤防	古墳	古墳
87	的場遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
88	籠ノ瀬遺跡	自然堤防	包含地	古墳、奈良、平安
89	欠ノ上Ⅰ遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	古墳、奈良、平安
90	欠ノ上Ⅱ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、奈良、平安
91	欠ノ上Ⅲ遺跡	後背湿地	包含地	古墳、奈良、平安
92	矢来遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	古墳、奈良、平安
93	北日城遺跡	自然堤防	城館	室町、江戸
94	郡山遺跡	自然堤防 後背湿地	寺院跡	奈良、平安
95	西台畑遺跡	後背湿地	包含地	弥生、古墳
96	若林城跡	自然堤防	城館	戦国～江戸
97	猫塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
98	糞種間遺跡	自然堤防	包含地	平安（後）
99	法領塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
100	南小泉遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡	古墳
101	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳
102	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防 自己河道	包含地	古墳、奈良、平安
103	神柵遺跡	自然堤防	包含地	縄文,弥生,古墳,奈良
104	沖野館遺跡	自然堤防	城館	中世
105	中柵西遺跡	自然堤防	包含地	弥生,古墳,奈良,平安
106	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防 自己河道	包含地	古墳、奈良、平安
107	河原越遺跡	後背湿地	包含地	弥生,古墳,奈良,平安
108	日辺館遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	室町（後）
109	日辺遺跡	自然堤防 後背湿地	包含地	古墳
110	大塚山古墳	自然堤防	円墳	古墳
111	中田神社裏遺跡	自然堤防	包含地	古墳、平安
112	柳生台畑遺跡	自然堤防 自己河道	包含地	奈良、平安
113	伊古田遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
114	松ヶ丘遺跡	丘陵	包含地	縄文

Ⅴ　調査の方法と基本層位

調査区の設定は、遺構が損壊を受ける建築部分346.79㎡を中心とし、敷地内に排土部分を確保した上で、約230㎡とした。

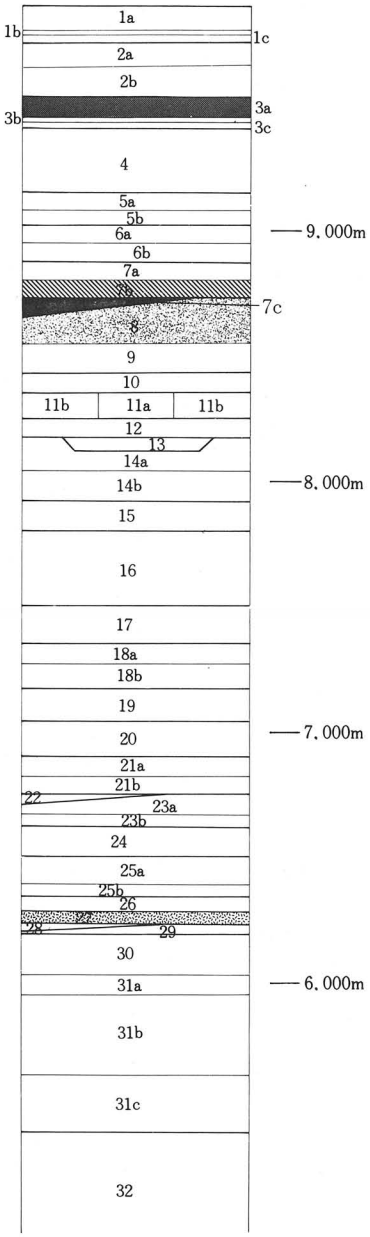
調査に先行し、近隣住民への配慮から、塵芥の飛散防止のためのフェンスを設置した後、発掘調査を開始した。

表土約１～1.5ｍを重機を用いて排除し、旧水田上面を検出した後、人力で土砂を掘り下げた。トレンチはほぼ中央部に土層観察用のベルトを設け、東区と西区とに分け調査を行った。

調査の進行に伴い、トレンチ壁の高さ1.5～1.8ｍ毎に段をつけ、壁土の崩落に留意した。なお、調査が梅雨時に実施されたため、トレンチの外周には排水溝を設け、常時排水ポンプで水を汲み上げた。

調査区内の地区設定については、前年度に実施して作成した基準点網図から基線を導き、原点を設けた。このことにより、昭和62年度以降国道座標への換算が可能となることになった。

基本層位については、長町折立線のⅤ区高速鉄道鍋田変電所用地との対応が行われ、第３図のように土層を分層した。



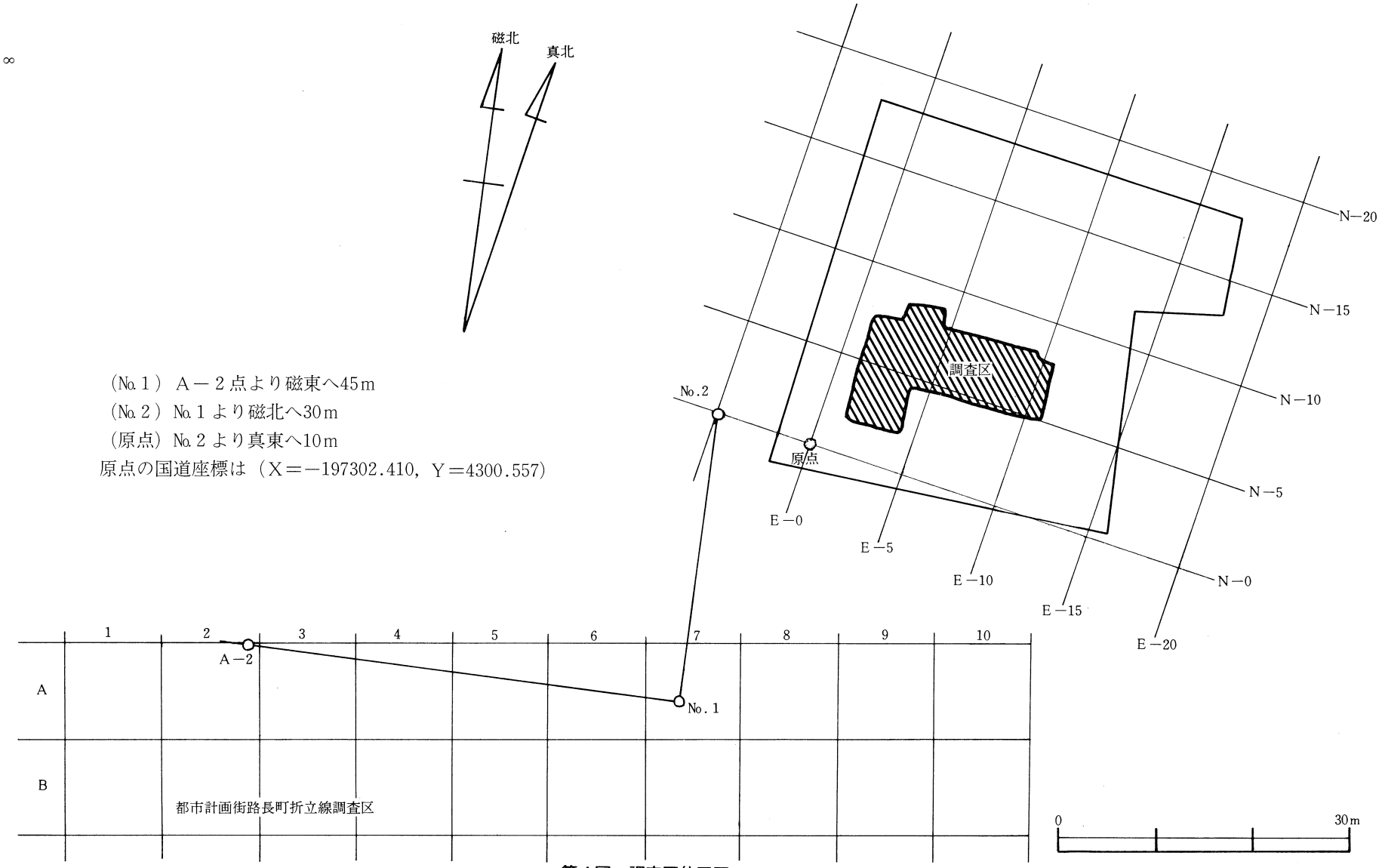
第３図　基本層位柱状図

Ⅵ　発見遺構と出土遺物

＜１層＞

最上層の水田作土で、盛土される直前の旧水田の畦畔（上端幅約60㎝、東西方向）が確認される。現代の遺物の他、近世以降の陶磁器、瓦質土器、古代の土師器、須恵器、瓦、種子を出土している。

陶器では碗、皿、鉢、摺鉢などの器種がみられ、⅓程残存する志野焼の皿（遺物登録№Ⅰｂ－６・第５図－２）や、磁器では肥前産と思われる染付の破片もみられる。瓦は丸瓦の破片で筒部と玉縁部分の接合部分を出土している。


磁北
真北
(No.1) A－2点より磁東へ45m
(No.2) No.1より磁北へ30m
(原点) No.2より真東へ10m
原点の国道座標は (X＝－197302.410, Y＝4300.557)
No.2
原点
調査区
N－20
N－15
N－10
N－5
N－0
E－0
E－5
E－10
E－15
E－20
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
A
B
A－2
No.1
都市計画街路長町折立線調査区
0
30m

第4図　調査区位置図

＜２層＞

２層は、酸化鉄の集積層である１ｃ層を削り込むうちに検出される。上層の２ａ層は暗褐色の粘土層で、黒褐色粘土の２ｂ層下面には酸化鉄の集積が縞状にみられた。

調査区壁面の観察では１層からの掘り込みによる堆積状況の乱れが確認でき、２ａ・２ｂ層ともに１層の耕作時(旧水田・現代)にその一部が作土として利用されていたものと考えられる。

畦畔等の遺構は検出されなかったが、２ｂ層下面の酸化鉄層の存在から乾田の存在が推定できる。

２層中からは次の遺物が出土した。２ａ層からは土師器１点、２ｂ層西区からは土師器11点、須恵器３点、陶器１点、種子１点を、２ｂ層東区からは土師器２点、須恵器２点、陶器１点、種子１点が出土している。

２ａ層の土師器は坏の口縁部の破片である。

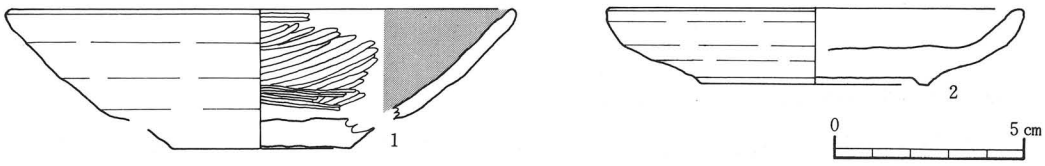
２ｂ層西区の土師器11点は坏、甕等の破片である。須恵器３点は坏、甕と口縁部に段を有する壺の破片である。東区の土師器２点は坏、甕の破片である。須恵器２点は蓋と大型の甕の破片である。陶器は鉢の口縁部破片である。

種子はいずれもウメと思われる。

＜３ａ層＞

３ａ層は、２ｂ層を薄く削り込んで検出した。にぶい黄褐色を呈する砂質シルト層で、東区、西区ともに分布し、層厚は３～15cmである。３ａ層上面全体に灰白色火山灰が分布するが、Ｔ字状の畦畔上部には火山灰が特に多くのった状態でプランを検出した。畦畔は東区で東西方向に10m以上、南北方向に5.5ｍ以上で一枚の水田面積は55㎡以上である。西区では東西方向に7.5m以上を検出したが水田一枚の面積は不明である。

東西方向の畦畔は、方向はＥ－2°－Ｎで19.5m以上、上端幅0.5～0.8m、下端幅0.9～1.2mを測り、断面形は偏平な台形状を呈す。水田面との比高差は0.1～6.5cmで最も差のある所で10.1



No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	登録	写真
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		No.	図版
1	土師器	坏	３ａ	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	黒色処理 ヘラミガキ	黒色処理 ヘラミガキ	黒色処理 ヘラミガキ	3.7cm	13.2cm	4.7cm	⅓	Ｄ－２	16－７
2	施釉陶器	皿	１ｂ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ		2.1cm	10.8cm	6 cm	⅙	Ib－６	16－８

第５図　１ｂ・３ａ層出土遺物実測図

cmである。直交する南北方向の畦畔は、方向はN－2°－Eで5.5m以上、上端幅0.3～0.5m、下端幅0.8～0.9mを測り、断面形は偏平な台形状を呈す。水田面との比高差は、0.8～1.0cmである。

3a層の標高は、東区・西区を通して最も高いところで9.62m(東区)、最も低いところで9.48mである。水田面の標高は、9.50～9.61mであり、ほぼ平坦であるといえる。

水田は、畦畔の一部を検出したのみで、水口なども発見されず、一枚の水田面積など不明である。3a層下層には酸化鉄の集積はみられず、下面は耕作により乱れている。

3a層からは次の遺物が出土した。東区では畦畔上面から土師器・須恵器各1点、種子2点を、作土上面から土師器2点、層中から土師器3点、須恵器1点、種子6点を、西区では層中から土師器18点、須恵器1点、種子3点を出土している。

西区作土から出土した土師器坏D－1は、内黒処理を施された口縁部から体部上半にかけての破片で、内湾気味に立ち上がり、口縁部で外傾する。土師器D－2（第5図－1）は、内面ヘラミガキ、黒色処理を施された残存⅓程の坏で、底部には回転糸切り痕がみられる。須恵器高台付坏E－5は、比較的高い高台をもつ底部の破片である。また、接合することはできなかったが、同一個体とみられる土師器甕の体部から口縁部にかけての破片を出土している。

東区作土からは直立気味に立ち上がる須恵器鉢E－4の口縁部の破片を出土している。

＜3b層＞

にぶい黄燈色の砂質シルト層である。西区の南側で畦畔状の高まりが検出された。方向はE－11°－Sである。上端幅は1.2～0.2m、下端幅は2.1～0.5mと均一でない。水田面との比高差は小さく、0.1～0.7cmである。3a層上面検出の畦畔との距離は1～0.5mで、調査区内では交差しないが、西側で交わるものとみられる。

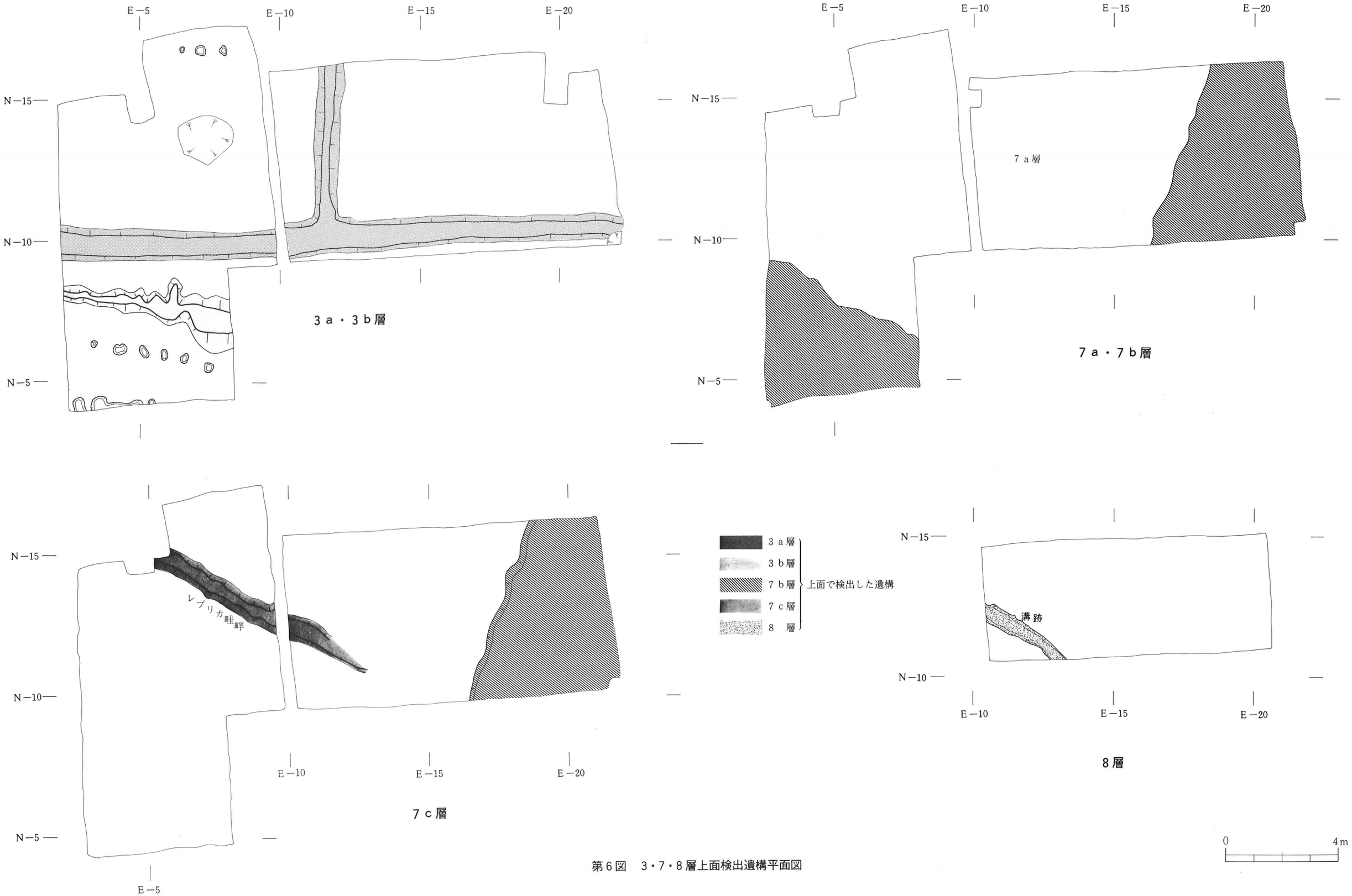
また、この畦畔状の高まりの南側に6個のピットが一列に、北側に3個のピットが検出された。南側のピットは畦畔状の高まりから1.2～0.2mの距離である。重複関係はなく、ピットの間隔は40～60cm、平面プランはほぼ円形で10～50cm、深さは2～6cm、埋土は単層で3a層、ピットからの出土遺物はない。

東区で土師器坏の破片を2点出土している。

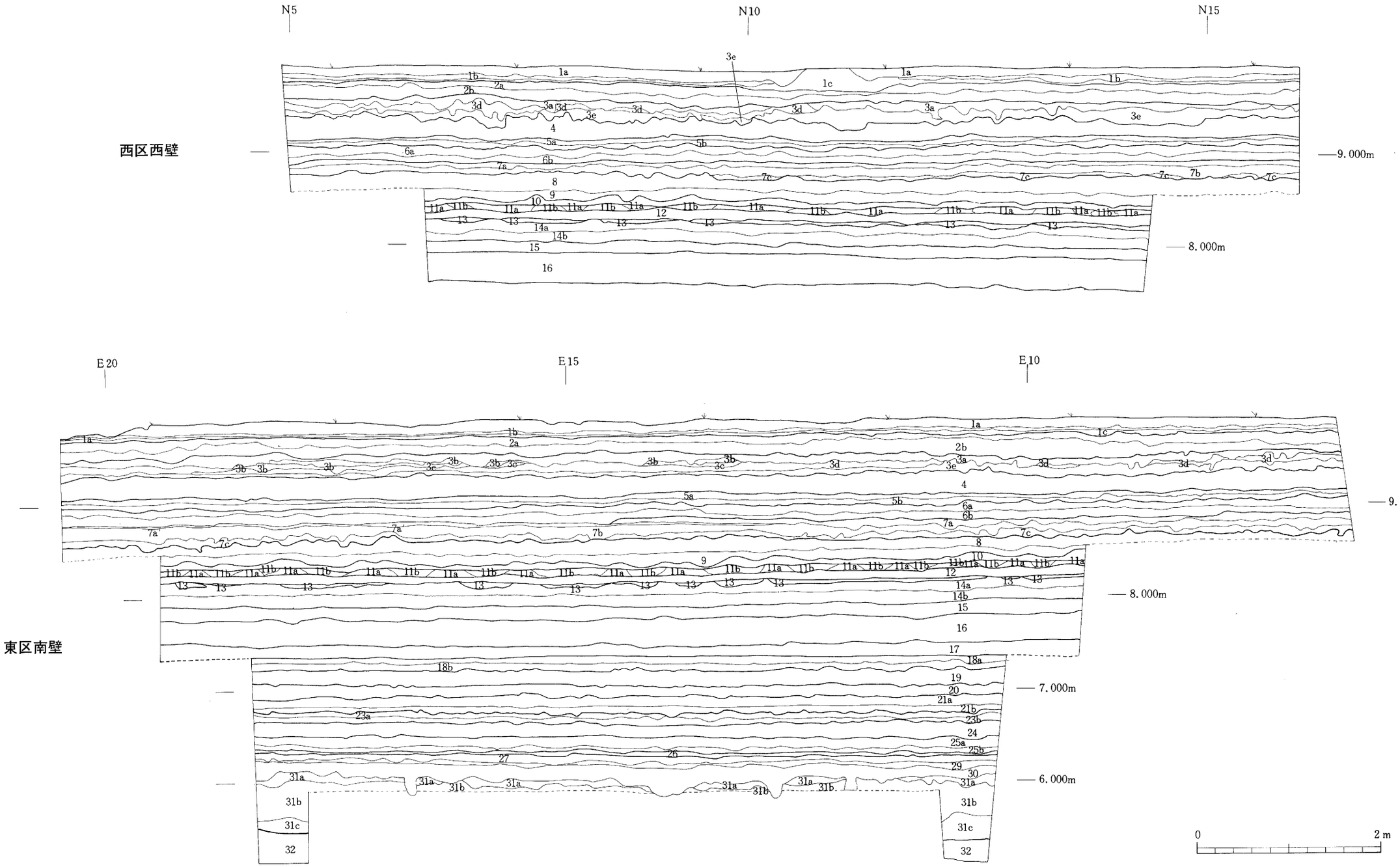
この下層のにぶい黄褐色粘土質シルト3c層は酸化鉄の集積層で3a・3b層が乾田として利用されていたことがうかがえる。

＜4層＞

褐灰色粘土とにぶい黄褐色シルトの互層をなしており、遺構も検出せず、堆積状況にも乱れ



第６図　３・７・８層上面検出遺構平面図

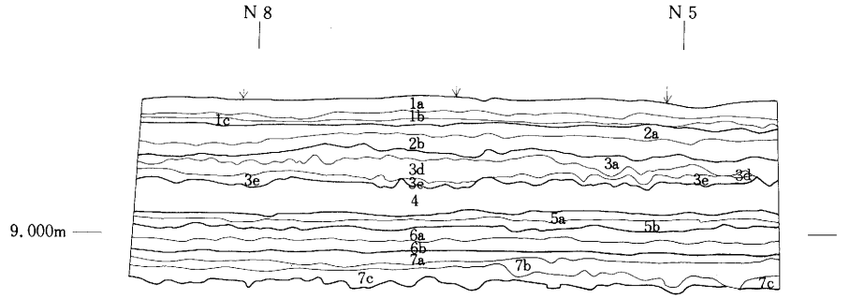

西区西壁
N5
N10
N15
9.000m
8.000m
東区南壁
E20
E15
E10
9.000m
8.000m
7.000m
6.000m
0
2 m

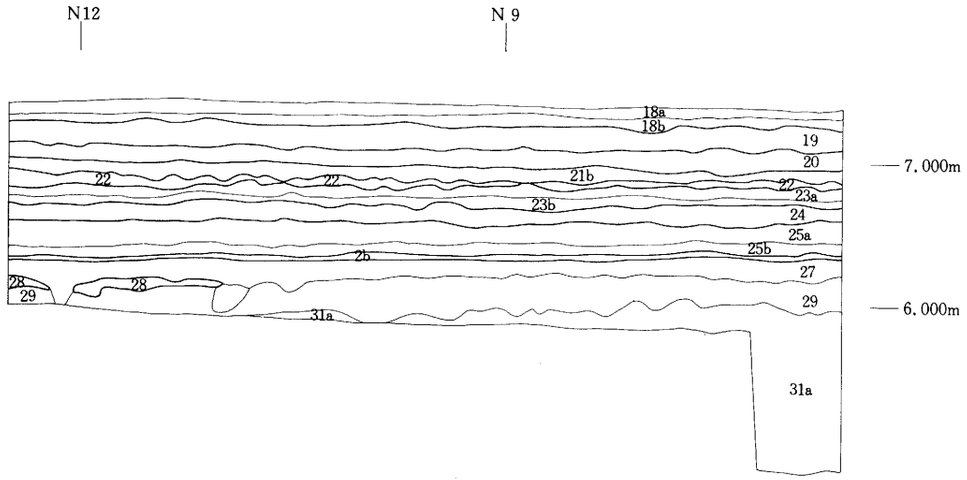
第7図　調 査 区 断 面 図

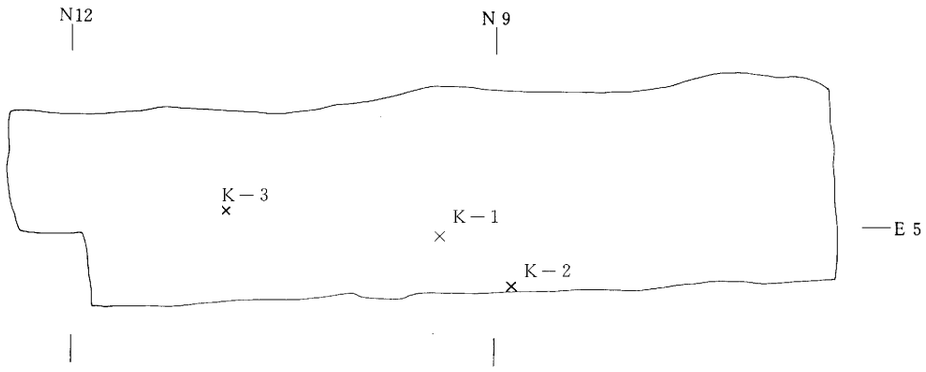
土 層 註 記 表

層No	土　　色	土　質	そ　の　他	層No	土　　色	土　質	そ　の　他
1 a	7.5 YR3/ 2黒 褐 色	シルト質粘土	凝灰岩の粒を少量含む	14 b	10 YR4/2 暗 褐 黄 色	粘　土	植物遺体を含み2.5Y6/3 にぶい黄色シルトとの互層
1 b	10 YR 3/3 暗 褐 色	シルト質粘土	凝灰岩の粒を多量含む	15	2.5 Y　2/1 黒　色	粘　土	植物遺体を含み暗褐色シルトとの互層
1 c	10 YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	凝灰岩を粒状に含む。酸化鉄の集積層	16	2.5 Y　4/1 黄 褐 色	粘　土	植物遺体を含み2.5YR3/1 黒褐色シルトとの互層
2 a	10 YR3/4 暗 褐 色	粘　土		17	5 Y　2/1 黒　色	粘　土	植物遺体を含み5 Y2/2 オリーブ黒色シルトとの互層
2 b	10 YR2/3 黒 褐 色	粘　土		18 a	2.5 Y　6/3 にぶい黄褐色	粘　土	植物遺体を含む
3 a	10 YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰白火山灰を層上面・層中に含む	18 b	2.5 Y　2/1 黒　色	粘　土	暗いオリーブ褐色シルトとの互層
3 b	10 YR6/3 にぶい黄橙色	砂質シルト		19	2.5 Y　3/1 黒 褐 色	粘　土	2.5 Y3/3
3 c	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄の集積層	20	5 Y　3/1 オリーブ黒色	粘　土	5 Y2/1黒色シルトとの互層
3 d	7.5 YR4/2 灰 褐 色	粘　土	10YR5/6 黄褐色 10YR2/1 黒色シルトとの互層	21 a	2.5 Y　2/1 黒　色	粘　土	植物遺体を含み5 Y4/2灰オリーブ色シルトとの互層
3 e	7.5 YR4/2 灰 褐 色	粘　土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトとの互層	21 b	2.5 Y　2/1 黒　色	粘　土	
4	10 YR4/1 褐 灰 色	粘　土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトとの互層	22	2.5 Y　4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	砂礫を含む
5 a	10YR 5/3 にぶい黄褐色	粘　土	植物遺体を含む	23 a	2.5 Y　3/2 黒 褐 色	粘　土	5 Y2/1黒色シルトとの互層
5 b	10 YR5/3 にぶい黄褐色	粘　土	植物遺体を含む	23 b	5 Y　2/1 黒　色	粘　土	2.5Y3/2黒褐色シルトとの互層
6 a	10 YR2/1 黒　色	粘　土	10YR4/3 にぶい黄褐色シルトとの互層	24	2.5 Y　3/1 黒 褐 色	粘　土	
6 b	5 YR3/1 黒 褐 色	粘　土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトとの互層	25 a	2.5 Y　4/1 黄 褐 色	粘　土	
7 a	10 YR3/3 暗 褐 色	粘　土	植物遺体を多く含む	25 b	2.5 Y　4/2 暗褐黄色	粘　土	
7 b	10 YR3/3 暗 褐 色	粘　土	10YR6/2 灰黄褐色シルトとの互層	26	2.5 Y　2/1 黒　色	粘　土	火山灰を上面にのせる
7 c	10 YR3/3 暗 褐 色	粘　土	10YR5/2 灰黄褐色シルトとの互層	27	2.5 Y　4/2 暗褐黄色	粘　土	石器の包含層
8	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘　土	10YR3/1 黒褐色シルトとの互層	28	5 Y3/2 オリーブ黒色	砂質粘土	砂を全体に含む
9	10 YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト		29	2.5 Y　4/3 オリーブ褐色	粘　土	
10	2.5 YR3/1 黒 褐 色	粘　土	植物遺体を含む	30	5 Y　3/2 オリーブ黒色	砂	
11 a	2.5 YR4/2 黄 褐 色		10YR3/4 暗褐色シルトとの互層	31 a	5 Y　6/2 灰オリーブ黒色	粘　土	
11 b	2.5 YR3/1 黒 褐 色	粘　土	11 a 層の分解の進んだ層	31 b	10 Y　5/2 オリーブ灰色	粘　土	
12	2.5 YR3/1 黒 褐 色	粘　土	植物遺体を含む	31 c	5 Y　6/3 オリーブ黄色	砂	
13	10 YR3/4 暗 褐 色	粘　土	植物遺体を含む	32	2.5 Y　3/2 黒 褐 色	砂質粘土	
14 a	2.5 YR3/1 黒 褐 色	粘　土	植物遺体を含み2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトとの互層				

西区東壁

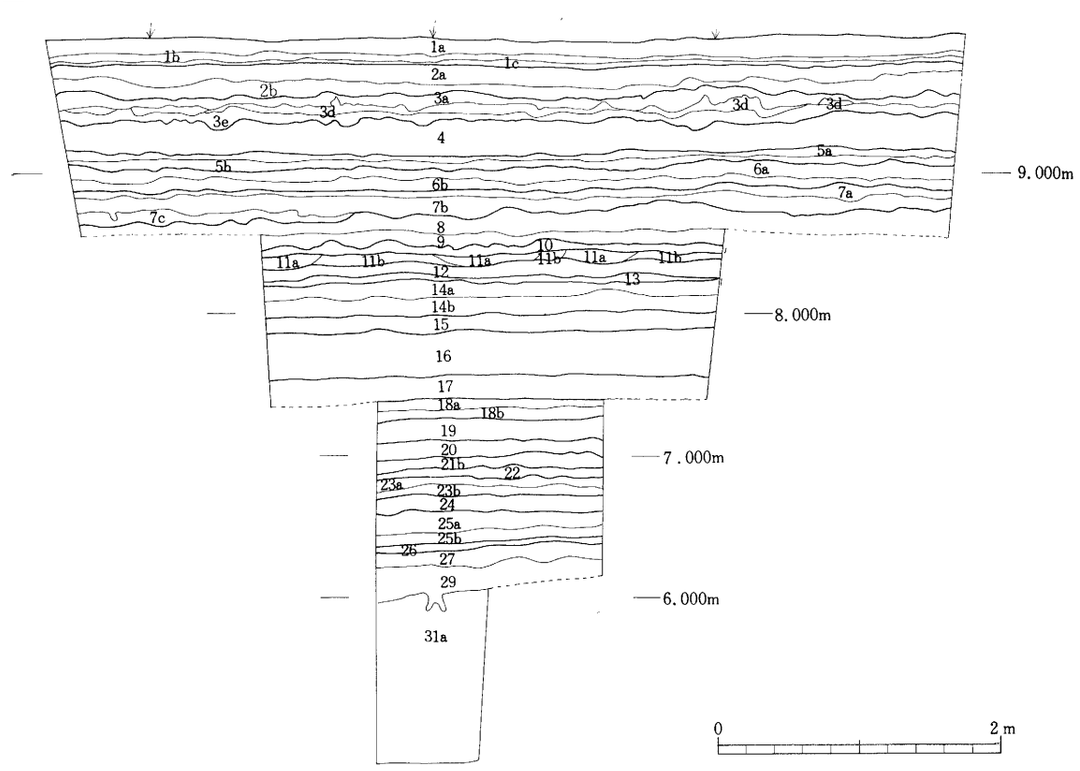






西区27層石器出土地点

西区南壁



第８図　調査区平面図・断面図

は確認できなかったが、東区で木片が斜めに刺さった状態で検出した。一部炭化してはいるものの、頭部は腐敗しており、また末端部分にも明瞭な加工痕を残していないため、木杭であるとは捉えがたい。

＜５ａ・５ｂ層＞

５ａ・５ｂ層はともににぶい黄褐色粘土で、間層に黒色スクモ層をはさんでいる。堆積状況に乱れはなく、耕作の痕跡は確認できなかったが、西区南西角で５ａ層の上面がやや盛り上がる。近辺の調査の対応する層上面で弥生時代十三塚式期の水田遺構を検出しており、なんらかの遺構となる可能性も有している。木片や種子を出土している。

＜７ａ層＞

東区東側では７ａ層の堆積が薄く、７ｂ層が同レベルで確認された。その境のラインの方向はＮ－19°－Ｅで、ほぼ直線的である。層厚の差は２～５cmである。河川等の影響を受けているものと考えられる。炭化した木片を数点出土している。

＜７ｃ層＞

暗褐色粘土と灰黄褐色シルトが互層をなしている。わずかに色調差のある７ｂ層を薄く削り込んでいき畦畔状のプランを検出した。方向はＥ－27°－Ｓで東西4.4ｍにわたって検出した。上端幅20～40cm、下端幅70～100cmを測り、周囲の７ｃ層との比高差は南側で2.9～3.1cm、北側で2.9～3.2cm程である。西区北側の調査区壁面では７ｂ層から７ｃ層の一部を削り込んでおり、上層の水田の「レプリカ畦畔」と考えたい。７ｃ層からの遺物出土はないが、７ｂ層からは鉄滓と種子を１点ずつ出土している。

＜８層＞

にぶい黄褐色粘土と黒色シルトの互層で、層厚は12～21cmである。東区西側で溝跡１条、西区南西角で８層の落ち込みを検出した。

溝跡は東区でのみ3.1ｍを検出し、西区では検出されなかった。方向はＥ－33°－Ｓ、上端幅は40～70cm、下端幅は20～40cmで南側で幅が狭くなる。断面形は逆台形を呈し、壁の立ち上がりはやや弧状を示す。深さは北端で５cm、南端で３cmで、底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色粘土で、出土遺物はない。人為的な遺構とは認めがたい。

西区の落ち込みは、７ｃ層を薄く除去していき、南西角で８層との境を検出した。調査区壁面の観察から、７ｃ層と８層との境界は不明瞭で、かつ７ｂ層下面の堆積状況の乱れも及んで

おり、７ａ層と７ｂ層との判別が困難なことから、上層からの耕作などの影響によるものと考えられる。８層からの遺物の出土はなかった。

＜11層＞

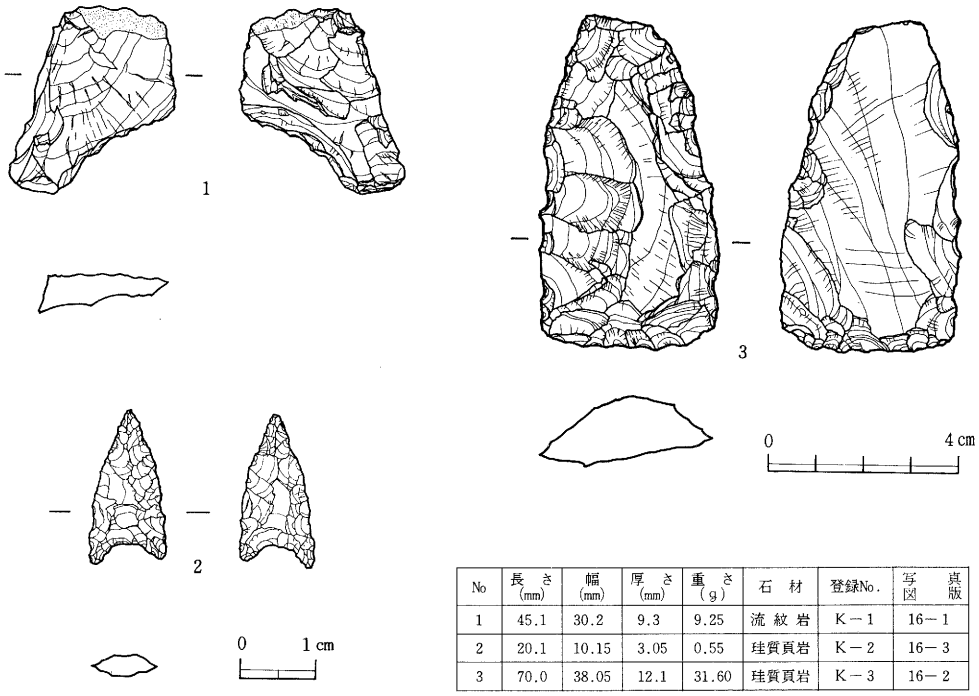
11層は黄褐色粘土と暗褐色シルトの互層である11ａ層を基層とし、この層の分解が進んだとみられる黒褐色粘土の11ｂ層が平面的に斑状に調査区全体に分布する。層厚は11～12cm程である。11層からの出土遺物はなく、詳細は不明である。

＜26層＞

26層は地表面から約4.5ｍ程下層の標高6.4～6.5ｍ前後で検出したため、段掘りによりトレンチの大きさは西区で南北方向に1.6×5ｍ、東区で東西方向に2.5×8ｍ程である。黒色粘土の26層上面で直径２～10cm大の灰白色火山灰を斑に検出した。火山灰の厚さは１～２mm、26層の層厚は４～８cm程度で南側の方が北側よりも厚い堆積状況を呈す。

＜27層＞

27層は暗褐黄色粘土層で、層厚は15～23cmである。層中から石器３点を出土している。



No	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	登録No.	写真図版
1	45.1	30.2	9.3	9.25	流紋岩	K－1	16－1
2	20.1	10.15	3.05	0.55	珪質頁岩	K－2	16－3
3	70.0	38.05	12.1	31.60	珪質頁岩	K－3	16－2

第９図　27層出土遺物実測図

27層上面の標高は、ほぼ6.3ｍ前後であるが、東から西にむけてわずかに傾斜している。剝片石器Ｋ－１（第９図－１）は、27層を薄く削り込んでいき、標高6.3ｍ前後の27層上部、西区中央で出土した。

石鏃Ｋ－２（第９図－２）は、西区中央部トレンチ西壁際、標高6.25ｍ、27層下面で出土した。

スクレーパーＫ－３（第９図－３）は、西区北半部、標高6.18ｍ、27層下面で出土した。

東区・西区ともに調査区を50cmの小区画に区切って27・28層の土砂を掘り上げ、ウオーターセパレーションによって遺物を捜したが、剝片石器Ｋ－１出土地点で同一個体の小破片１点を出土した他には遺物の出土はなかった。この小破片は、遺物検出の際にスコップにより欠損した破片とみられる。

28層上面でも精査を行なったが、凹凸はみられるものの、明瞭なプランと認定できるものはなく、遺物の出土もなかった。さらにトレンチ角部分の深掘りを行ない、青灰色にグライ化した32層まで基本層位の確認をし、調査を終了した。

Ⅶ　まとめ

今回の調査の結果、次のことが判明した。

①　３ａ層上面及び層中で平安時代（10世紀）に降下したと考えられる灰白色火山灰を確認し、この時期の水田跡を検出した。検出した畦畔は真北方向を基準に直交している。

②　３ｂ層上面で、平安時代の時期と考えられる畦畔状の高まりとピット列を検出した。

③　７ｃ層上面でレプリカ畦畔を検出した。上層水田畦畔の下層遺構と考えられ、鉄滓を出土している。

④　８層上面で溝跡を１条検出した。時期などは不明である。

⑤　26層上面で灰白色の火山灰を斑状に検出した。

⑥　27層は縄文時代の石器包含層で、３点を出土した。この層は、都市計画街路長町折立線に伴う発掘調査Ⅴ区で検出した石器包含層と同一層とみられる。

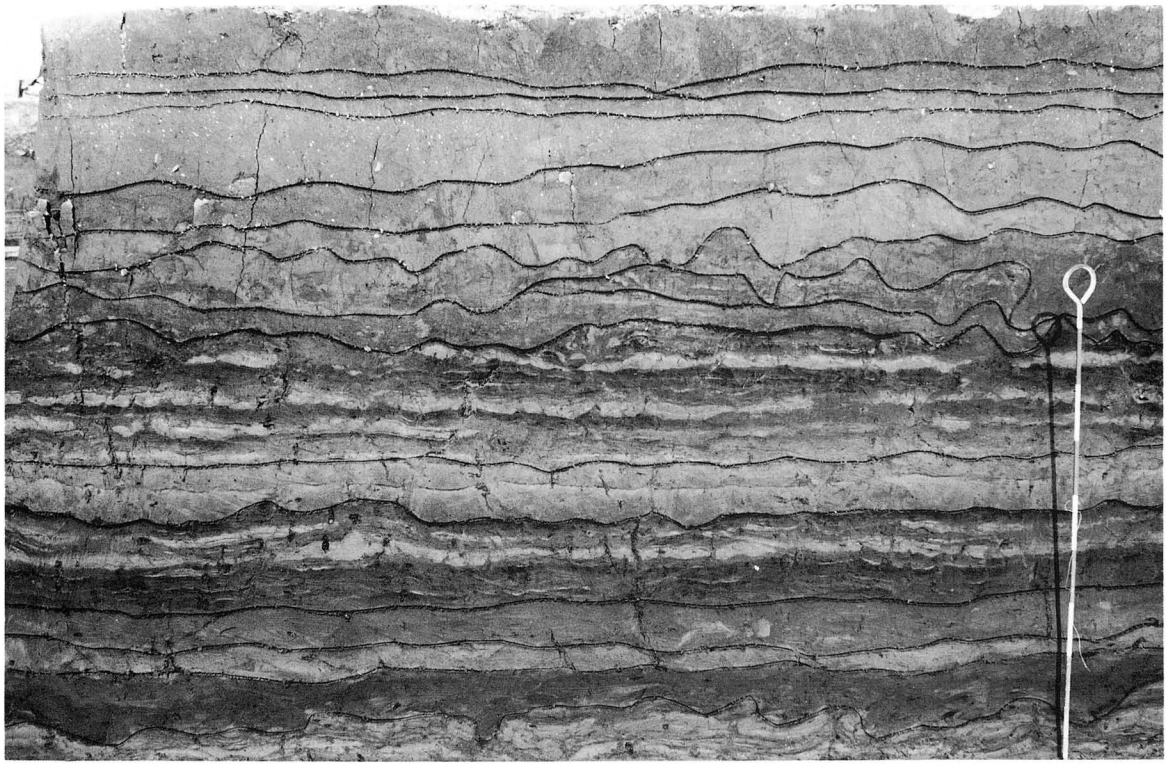
以上のように、平安時代の水田跡、弥生時代頃のレプリカ畦畔、縄文時代の遺物包含層の存在が明らかになり、調査区の北、東、西にも遺構の分布が広がることが判明した。

註１．地団研仙台支部編　1980「新編 仙台の地学」
註２．経済企画庁　1967「地形・表層地質・土じょう 仙台」
註３．中田他　1976「仙台平野西縁・長町－利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28巻　第２号　P111～120
註４．松本秀明　1981「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第52巻第２号　P72～85
註５．安田喜憲　1978「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』P517～594

図版１
２層遺物
出土状況
（東より）

図版２　東区３ａ層畦畔（北より）

図版３　西区３a・３b層検出遺構（西より）

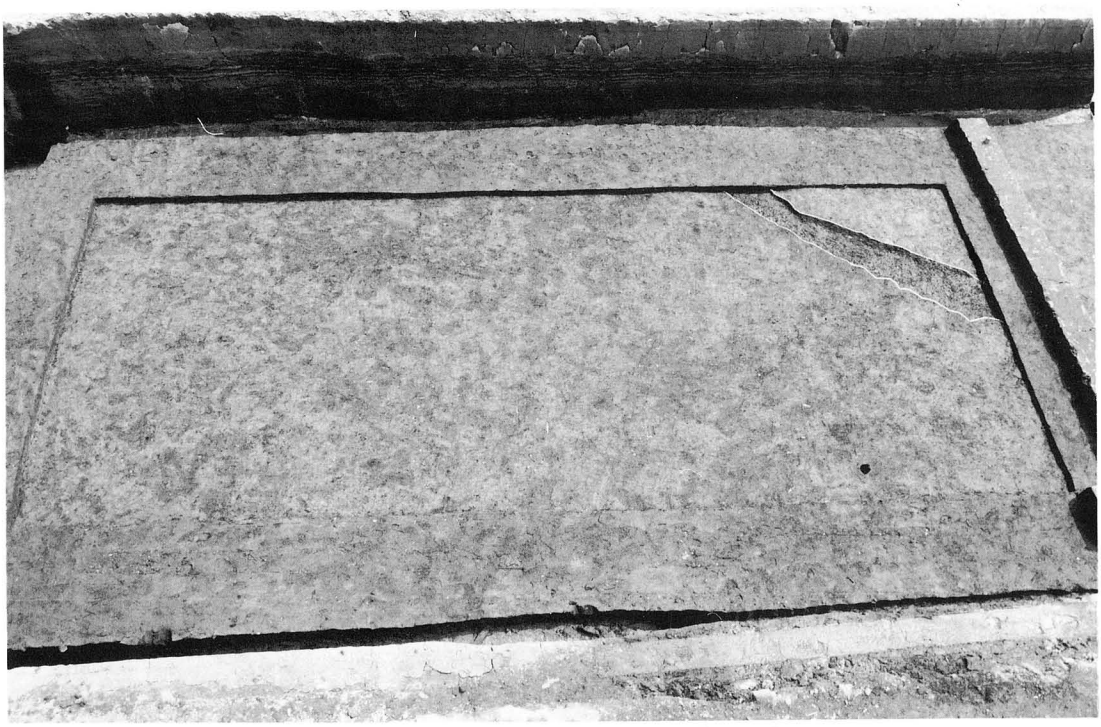


図版４　西区東壁セクション１～10層（西より）

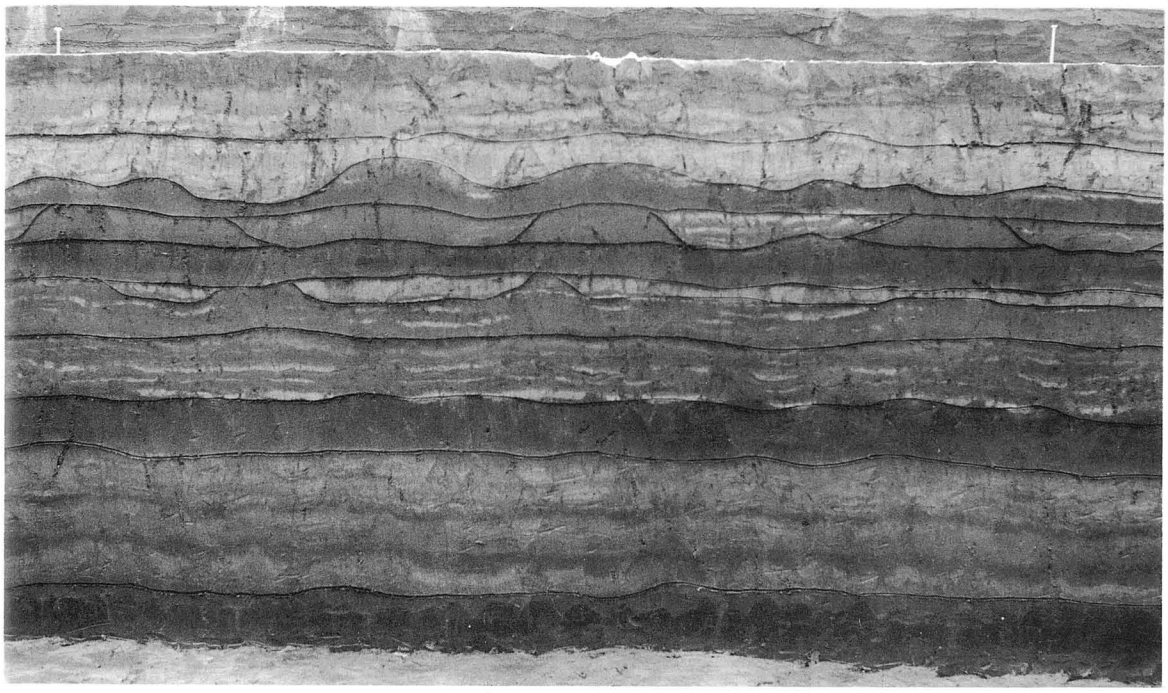
図版５　東区東半７ｂ層落ち込み
及び７c層レプリカ畦畔検出状況（北より）

図版６　西区７ｃ層レプリカ畦畔検出状況（西より）

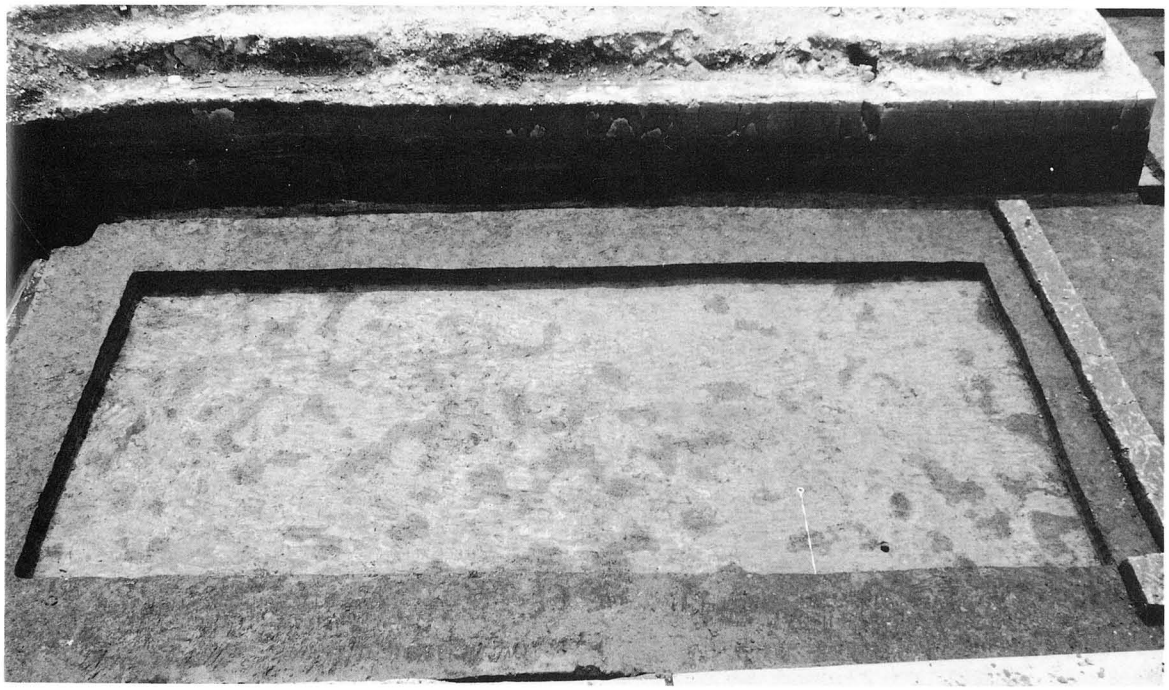
図版７　西区８層上面落ち込み（西より）



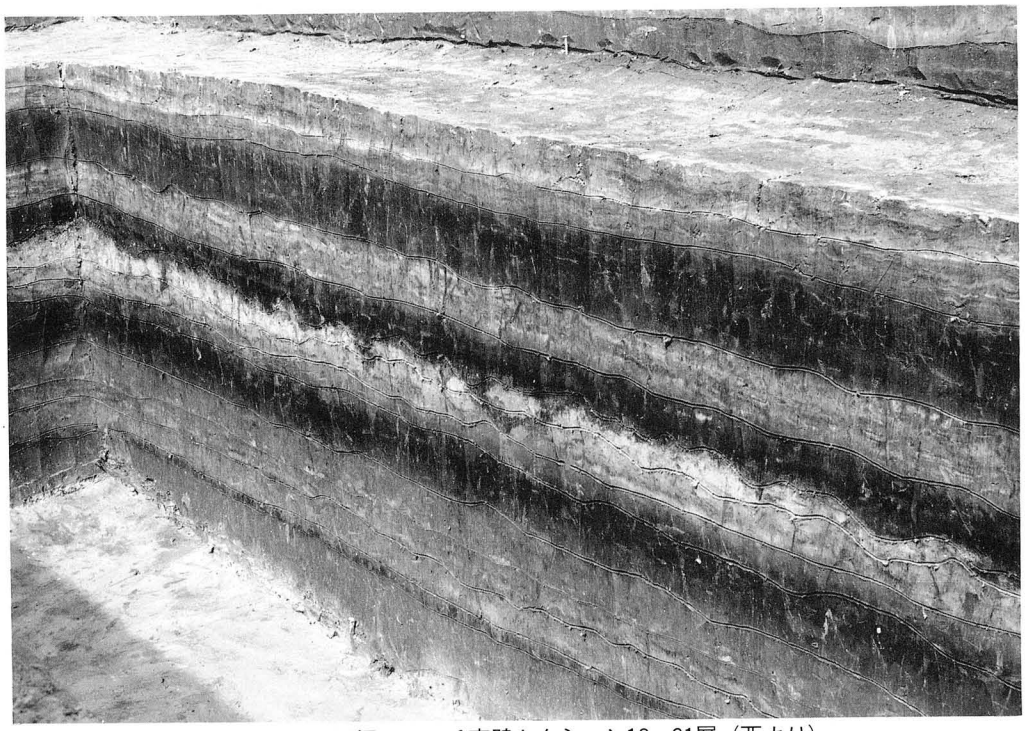
図版８　東区８層上面検出溝跡（北より）



図版９　東区南壁セクション８～18層（北より）



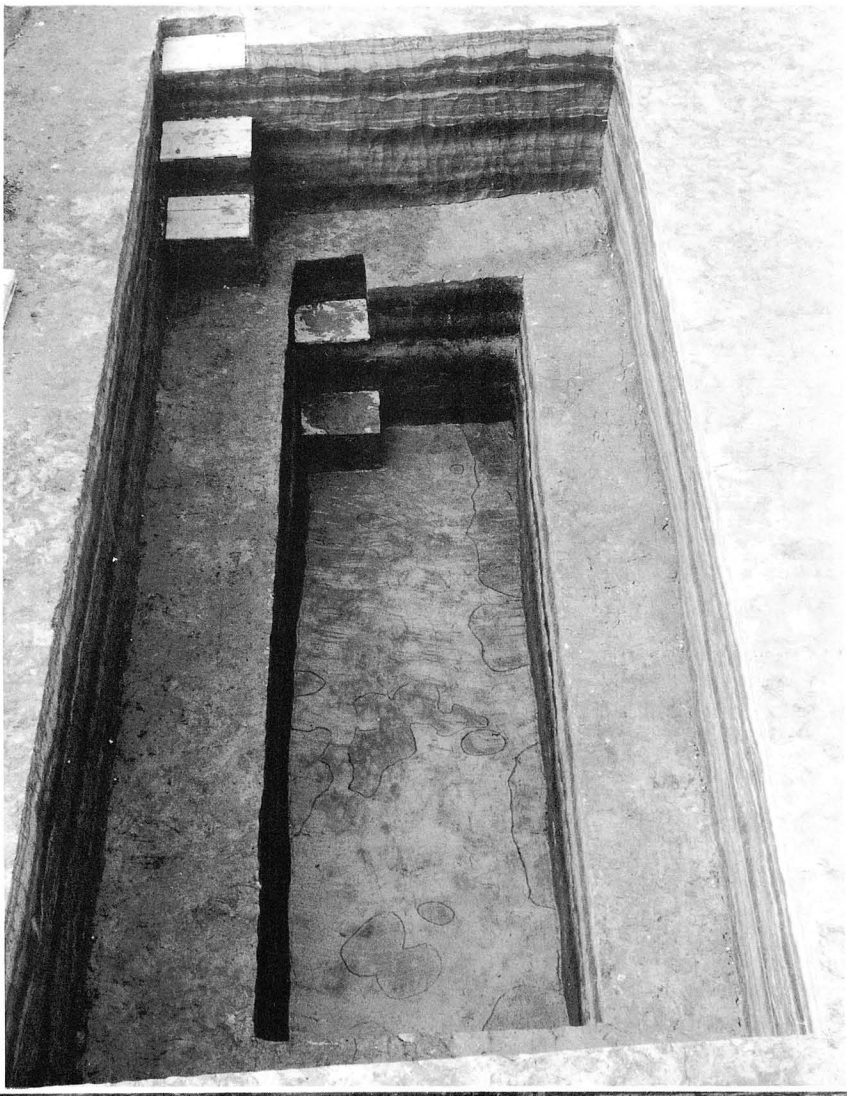
図版10　東区11a・11b層検出状況（北より）



図版11　西区深掘トレンチ東壁セクション18～31層（西より）

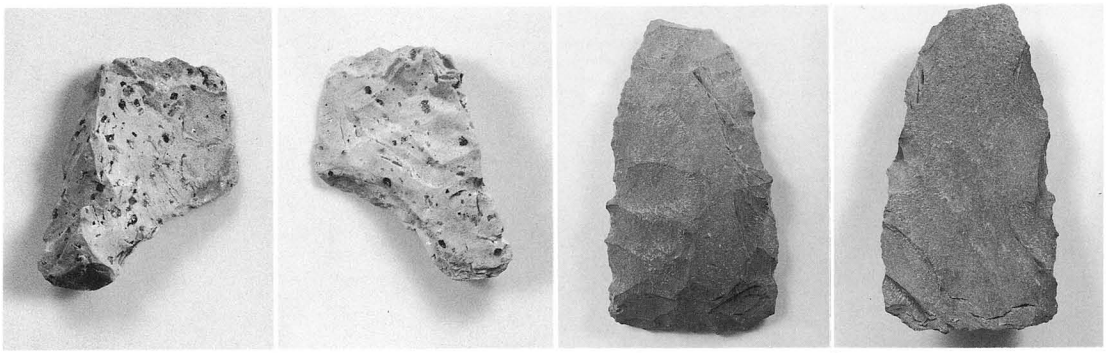
図版12　K－2石鏃出土状況
（東より）

図版13　K－3スクレーパー出土状況
（東より）



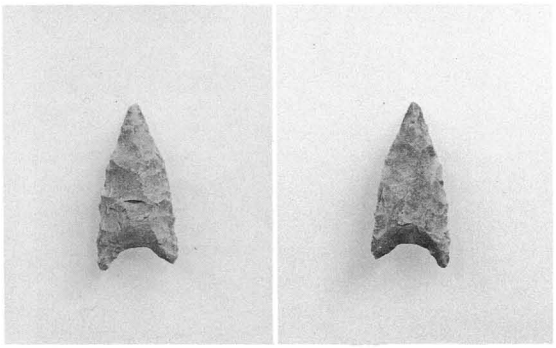
図版14
西区深掘
状況
32層上面
（南より）

図版15　東区深掘状況32層上面（南より）



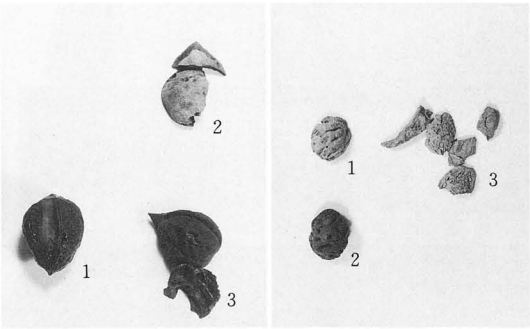
1　　2

1．K－1　剝片石器　　第9－1図
2．K－3　スクレーパー　第9－3図
3．K－2　石　　鏃　　第9－2図



3

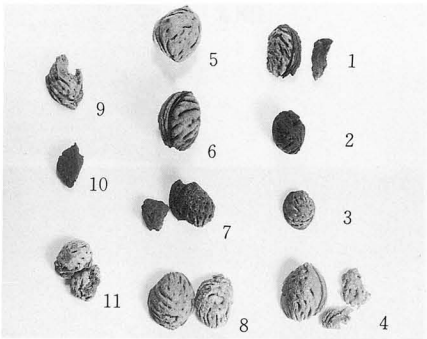
6．(1)　O－2　種子　3a層出土
(2)　O－3　種子　3a層出土
(3)　O－6　種子　3a層出土
(4)　O－7　種子　3a層出土
(5)　O－8　種子　3a層出土
(6)　O－9　種子　3a層出土
(7)　O－10　種子　3a層出土
(8)　O－11　種子　3a層出土
(9)　O－12　種子　3a層出土
(10)　O－13　種子　3a層出土
(11)　O－14　種子　3a層出土



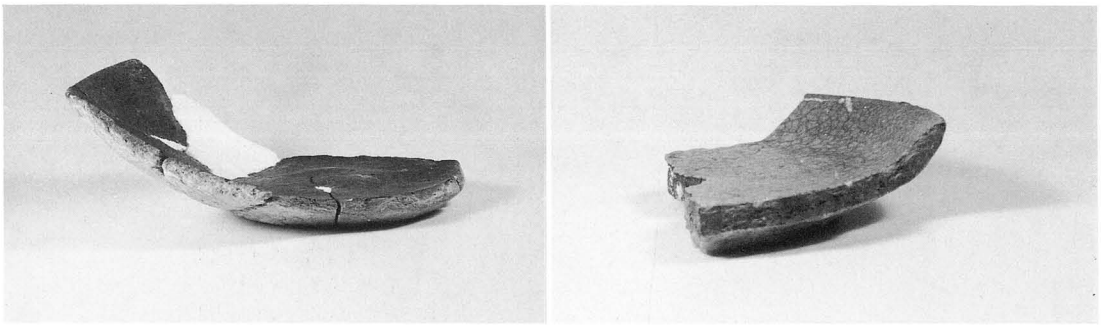
4　　5

4．(1)　O－15　種子　5b層出土
(2)　O－16　種子　7b層出土
(3)　O－17　種子　14b層出土

5．(1)　O－5　種子　2c層出土
(2)　O－4　種子　2c層出土
(3)　O－1　種子　2c層出土



6



7　　8

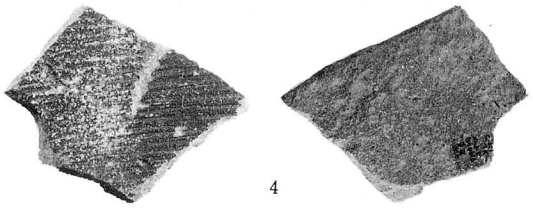
7．D－2　土師器坏　　第5－1図
8．Ib－6　施釉陶器皿　第5－2図

図版16　出土遺物

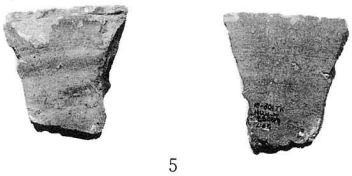
1

2

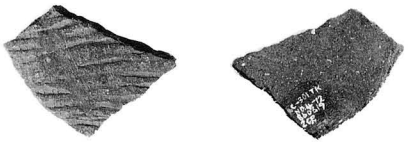
3



4



5



6

7

8

9

10

1．Ib－1　陶　器　1b層出土
2．Ib－2　陶　器　1b層出土
3．Ib－3　陶　器　1b層出土
4．E－1　須恵器　2c層出土
5．E－2　須恵器　2c層出土
6．E－3　須恵器　2c層出土
7．D－1　土師器　3a層出土
8．E－4　須恵器　3a層出土
9．E－5　須恵器　3a層出土
10．Ia－1　陶　器　2c層出土

図版17　出土遺物

文 化 財 課 職 員 録

課長　早坂春一

管理係　係長　佐藤政美

主事　岩沢克輔・山口　宏

技師　桑島栄男

調査係　係長　佐藤　隆

主事　結城慎一・木村浩二・篠原信彦・佐藤　洋・金森安孝・佐藤甲二・吉岡恭平
工藤哲司・渡部弘美・主浜光朗・斎藤裕彦・佐藤良文・長島栄一・及川　格
中富　洋・平間亮輔・佐藤　淳・渡部　紀・高橋　泰・鈴木善弘・松本素明

教諭　小野寺和幸・佐藤美智雄・太田昭夫・小川淳一・千葉　仁・松本清一

派遣職員　高橋勝也

仙台市文化財調査報告書第104集

富　沢　遺　跡

昭 和 62 年 3 月

発行　仙　台　市　教　育　委　員　会

仙台市国分町 3 － 7 － 1

仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱　東　北　プ　リ　ン　ト

仙台市立町24－24　TEL 263－1166